

が、その人物は実に平凡な、名も無い人物のほうが奥深いのだ。結城さんほどに顕在化し過ぎている。

七月十三日

九時起床。広島の本木君より、スケッチ届く。写真館を営んでおられる父君が健康を害し、そのケアーでしばらく作業がすまなかつた旨の手紙がそえられていた。広島の片田舎で家族を大事にしながら、しかも一人でコツコツと仕事を続けている本木君の姿が眼に浮かんだ。私なんかの研究室での生活などはまことに甘いのを、こういう便りから思い知らされる。本木の作品はどうしても私の建築に使おうと再び決意を新たにす。午前中、世田谷で休む。十三時過大学。十四時陸海博士論文相談。十五時講談社園部さん、打ち合わせ。十七時迄。

松崎町大沢温泉ホテルの依田博之氏からお手紙をいただく。大沢温泉ホテルのリノベーションに関しての相談である。大沢温泉ホテルは先代の依田敬一氏が今次郎さんの手を借りながら作り上げた伊豆半島有数の名門ホテルである。喜んで相談にうかがう事にした。こういう話しは嬉しい。松崎町の名町長だった依田敬一氏が亡くなられてから幾才月になるかな。

十七時過より室内連載原稿書く。「カタリベチーノ・結城、大いに語る」興が乗って十八時過ぎ書き終える。全ての原稿をこのスピードで書ければライターなんだけれど、そうはいかないのです。大久保駅前ソバ屋でビールを飲んで世田谷村に二十二時帰る。室内の原稿の表題だが、カタリベチーノ・結城よりもカタリベルティ・結城の方が良かったかな。人物を書くのが一番面白いのだ